

2022年10月9日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 11章 27～33節

説教題：主の権威に拠って生きる

私にはこんな経験があります。かつて若い頃、私には「あの政党が良くない」と嫌っていた政党がありました。ところが、ある日、気づいてみたら、その政党に属する県議員の方を応援する宴会に自分も出席していて、最後は「万歳、万歳」とやっているのです。自分の意志とか信念、そういうものがいかに芯のないものか、置かれた状況で簡単に変わってしまうものか、それを骨身に沁みて教えられました。拠って生きる権威ある存在が必要だと痛感しました。こんな話もあります。日本が国際連盟を脱退する頃の話だと思いますが、ある国際会議でドイツの代表が前に出て「ドイツ人は神以外のものを恐れない」と言ったそうです。次に日本の代表が出て来て「日本人は神さえも恐れない」と言いました。結局「神さえも恐れない」その頑なさで悲惨な戦争の道を通ってしまうのです。この話も、拠って生きる権威、正しく畏れるべき権威を持つことの大切さを語っているような気がするのです。

今日の箇所は、「主イエスの権威」について扱う箇所です。「内容」と「適用」に分けて学びます。

### 1：内容～主イエスの権威を認めない罪

前回は「イエス様一行が宿泊地ベタニヤからエルサレムに向かって歩いて行かれた時、『その前日にイエス様が呪われたいちじくの木が枯れていた』という出来事から、『真実の祈りが無い、その背後に疑いがあった』という話」をしました。その続きになります。イエス様はそのままエルサレムの神殿に入られました。(続いて火曜日の出来事になります)。神殿の中を歩いておられると「祭司長、律法学者、長老たち」(27)がやって来て、イエス様に「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか」(28 新共同訳)と問うて来たのです。

まず「祭司長(たち)、律法学者(たち)、長老たち」とは誰かということですが…。神殿は、ユダヤ人の信仰の中心であると同時に政治の中心でもありました。この時、ユダヤ人国家は、ローマ帝国の支配の下、3つの小国に分かれて存在していましたが、特にエルサレムのあるユダヤは、直接ローマから送られる総督の下で、最高議会(サンヘドリン)が自治政府のような働きをしていました。「祭司長(たち)、律法学者(たち)、長老たち」というのは、その構成員です。もう少し詳しく言うと「祭司長(たち)」がサドカイ派、「律法学者(たち)」がパリサイ派、「長老たち」が地域の代表、という形でした。その人々が、最高議会を構成し、神殿を管理し、ユダヤの政治を行い、広くユダヤ人社会の信仰生活をリードしていたわけです。言わば、彼らは「権威者」でした。その権威を持って「神殿を管理する権威(権利)」を行使していたのです。その彼らがイエスに問うのです。「何の権威で、このようなことをしているのか」(28 同)。

「このようなこと」というのは、恐らく月曜日の「宮聖め」の出来事だと思います。イエス様は神殿に來られて、「祈りの無さ」と「その背後にある神への疑い」、そのような霊的な状態を象徴するように「礼拝を利用して商売をしている人々」を追い払われました。商売の台をひっくり返された。そういう騒ぎを起こされたのです。私的な個人が、権威者からその立場を認められている「公的な商人」を追い払うことは大変なことでした。しかし、そのような大変なことをやったイエスが、今日も神殿の中で自由に振舞っているのです。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか」(28 同)。この質問の背後には、どのような思いがあるのでしょうか。

彼らにとって神殿は、「権威を持っている自分達の思い通りに運営され、自分達の権威が隅々まで行き渡っていなければならない場所」でした。そこに「イエス」というわけの分らない男がやって来て、勝手なことをしてくれる。それが気に入らないのです。もっと言うと、赦せないのです。彼らの質問を非常に良く解釈すると「あなたが高名なラビ(律法の教師)の弟子で、そのラビの委託を受けているのなら、赦さないわけでもない」ということだったかも知れない。現代イスラエルの学校で使われている歴史の教科書を読んだことがあります。教科書には「民族の偉人」として多くの

ラビの名前が出て来ます。紀元 70 年の「エルサレム崩壊」以降になると「ラビを中心に歴史が語られて行く」と言っても良いくらいです。それほど「高名なラビ」は、力を持っていたのでしょう。だから良く取れば、「それを聞いている」ということかも知れません。しかし「悪く」取れば、とうか恐らく「権威者である我々に無断で勝手なことをするな。ただでは済まないぞ。分かっているのか」と言うことでしょう。

それに対してイエス様は、彼らの質問に質問で答えられます。「イエスは彼らに言われた。『一言尋ねますから、それに答えなさい。そうすれば、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているかを、話しましょう。ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、人から出たのですか。答えなさい』(29~30)。「ヨハネのバプテスマは天からのものであったか」、つまり「神からのものであったのか、それとも人からのものであったのか」と聞かれました。イエスは、この質問によって何を意図しておられるのでしょうか。

結論から言うと、イエスは「祭司長(たち)、律法学者(たち)、長老たち」の問題を浮き彫りにしようとしておられるのです。実際彼らは、「バプテスマのヨハネが施したバプテスマ」を「神からのものである」と認めることが出来ませんでした。ヨハネの運動は、当時の人々に非常に大きな影響を与えた信仰覚醒運動でした。「マタイ 3 章 7 節」には「しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見た時、ヨハネは彼らに言った」(マタイ 3:7)とあります。「祭司長や律法学者」と非常に近い関係にあった人々も、ヨハネの中に神の預言者としての何かを認めて、ヨハネの許を訪れているのです。しかしそれでも「祭司長(たち)、律法学者(たち)、長老たち」は認めない。ヨハネの運動を、そのバプテスマを「神からのもの」と受け入れることは出来なかったのです。なぜでしょうか。

バプテスマのヨハネは、神殿に登場して、権威者達に「実は今から信仰覚醒運動を行いたい。『説教をして、バプテスマを施す』という新しい運動を始めたいから、その許可をもらえるだろうか」と言って来たのではないのです。エルサレムの神殿から離れたヨルダン川に現れて、運動を始めました。そして、(言うならば)神殿の礼拝、神殿の周りに生きる人々を指して「あそこに真実の礼拝があるのか、あの人々の中に真実の信仰があるか、お前達も皆悔い改めよ」と叫んだのです。「祭司長(たち)、律法学者(たち)、長老たち」が、ヨハネのバプテスマを「神からのもの」と認めるならば、彼らも、自分達の在り方の間違いを認め、自分達の権威も何もかも脇へ置いて、神の前に悔い改めなければならなかったのです。彼らには、それが出来なかった。悔い改めたくないからです。彼らの立っている所は「バプテスマのヨハネが言っていることが正しいのかどうか」ではないのです。「自分達の権威が守られるかどうか、自分達の権威にとって安全かどうか」、そこが彼らの立ち位置だったのです。だからヨハネが「400 年ぶりに現れた預言者」だと多くの人に認められ、人々に炎のような神の言葉を語っていたにも拘らず、ヨハネを認めなかった。「自分達の姿を振り返り、悔い改める」という思いがないからです。その彼らの頑なさが、イエス様への答にも出て来るのです。彼らは、イエスの宮聖めによる訴え、神殿の中での説教と論争、そういったものの中に、真実を見極めようとしているのではない。自分達の権威が幅を利かせなければならない場所で、自分達に断わりなしに勝手に入って来て、自分達の権威を無視するような、権威を傷つけるようなことをしていることが気に入らないのです。自分達の権威が大事なのです、守らなければならない。権威を守るための答が「わかりません」(33)という答でした。

イエスは、それによって彼らの「頑なさ」を確認されるのです。イエス様の権威は、バプテスマのヨハネと同じく「神から出ている権威」です。ヨハネから洗礼を受けられた時、天からの声が言いました。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マルコ 1:11)。しかし、ヨハネの権威を認めない彼らにそういうことを言っても無駄です。「神が…」と言っても、聞く耳はない。それを確認してイエス様は、「わたしも…話すまい」(33)と言われるのです。それは「勝手にしなさい」という断罪の言葉であったと同時に、「あなた方は今のままで良いのか」と悔い改めを勧める招きの言葉でもあったと思います。

## 2：適用～主イエスの権威を受け入れて生きる

この個所は、私達の信仰生活に何を語るのでしょうか。「祭司長(たち)、律法学者(たち)、長老たち」は、「自分達の権威の領域だ」と思っているところに、イエス様が勝手に入って来て活動されたことに腹を立てました。そしてイエス様を追い出そうとしました。私達はどうでしょうか。私達も「ここは自分の領域」というところを持っているのではないのでしょうか。ある本に「礼拝堂の椅子は互いに最低 50cm は間を空けるように」と書いてありました。密を避けるという意味ではありません。

「現代人には他の人に入って来て欲しくない領域」があると言うのです。信仰の問題で言えば、私達は自分の人生に対して、自分の権威を持とうとするのではないのでしょうか。「ここは私の領域、ここは私の自由になるところ」、自分の人生に対してそう思うのではないのでしょうか。しかしある牧師が言いました。「信仰を持つということは、私達の生活の中に神が自由に入り込んで来られることを受け入れることだ」。私達はどうでしょうか。神が私の生活に、私の人生に、自由に入り込んで権威を主張される時、それを素直に受け入れているのでしょうか。それとも、イエス様に対して「私には生きるべき私の人生があります。あなたは何の権威をもって、私に『十字架を負って従え』と言うのですか」と言って、神の権威を追い出そうとしているのでしょうか。もしそうだとしたら、そうするところに、今一つ信仰生活がどっしりと安定しない、落ち着かない理由があるのではないのでしょうか。

井上洋治という神父がこう言っておられます。「宗教が、学問と芸術とも、そして道徳とも異なるのは、『あちら様(神様)が主になって自分が従になる世界である』と言うことである…。神が主になる世界。つまり『神様(イエス様)の権威』を本当に認める世界、それが宗教の世界だ」と言うのです。しかし、それは決して窮屈な生き方ではないと思います。むしろ前向きに、恵みの中に生きることだと思うのです。

「自分の人生に神様(イエス様)の権威を認めるとは、どういうことか、そこにどんな恵みがあるのか」、3つのことを申し上げたいと思います。

1つは「与えられた状況に主の善を認める」ということです。レーナ・マリアという方がおられます。生まれた時から両腕がなく、左脚も右脚の半分くらいの長さ、左脚には義足をつけて生活し、大概のことは足でこなしながら、素晴らしい歌声で音楽活動をしておられる方です。彼女は、信仰篤いご両親に育てられ、自分の人生に神の権威を受け入れて人生を送っています。その彼女が言うのです。「神様は、きっと何か特別な計画があって私をこのように造られたのだと思います。神様は全能ですから、私の手や足を造り変えることも出来るはずですが、でもそうなさらずに、私に障害を残しておかれるのは、人間にとって一番大切なのは、身体の器官が整い健康であることよりも、心の健康であることを明らかにするためだと思っています。私はそんな神様を、よくコンサートで讃美します。『…神様は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません…』。両手がない私が『乏しいことはありません』と心から歌えるのは、神様が私の心に豊かさを与え、自分自身を愛せるようにしてくださっているからです。だから不自由だと思えるような環境の中でも生きることを意味を、いつも見つけることができるのです」(レーナ・マリア)。人生に神の権威(善)を受け入れる時、神と和解して、こんなにも前向きに生きて行けるのかと、教えられます。学ばされるのではないのでしょうか。

2つ目は「主が人生を主導し、責任を取って下さることを信じる」ということです。何度もご紹介していますが、「岩淵まことさん・由美子さん」というゴスペル・シンガーご夫妻の話です。ご夫妻は、亜希子さんというお嬢さんを8歳の時に病気で亡くしますが、由美子さんは当時の心境を「内臓が口から飛び出すのではないかと思うくらいに泣き続け、抜け殻のようになってしまいました」と語っておられます。特に彼女を苦しめたのは、自責の念なのです。「私はもう少し気遣ってやれば、あの時ああしていれば…」、それに苦しむのです。でも、ある時、彼女はイエス様の言葉を聞くのです。

「もう自分を責めるのは止めなさい。あなたが自分を責めているあの出来事の中にも、私はいました」。それが彼女の心に赦しを与える、彼女を立ち上がらせるのです。人とは過ち多き存在だと思えます。「ヤコブ書」にも「わたしたちは皆、度々過ちを犯すからです」(ヤコブ 3:2 新共同訳)とあり

ます。「良かれ」と思って掛けた言葉で人を傷つけるということだってある。「神が共にいて下さり、神が私の人生を主導して下さり、責任を取って下さる」、本当にそれを受け入れる時に、私達はこの「過ち多き」人生をもっと安らかに生きて行ける気がするのです。過去に苦しむ時にも、「でも主がいて下さったのだ」という思いのが、その苦しみの中であって一筋の光を見せて行くのではないでしようか。

3 つ目は「主の願いを生きようとする」ということです。ヴィクトル・フランクルという人が自らの「強制収容所の体験」を綴った「夜と霧」という本があります。その中に次のような話があります。(孫引きです)。ある夜、囚人代表がフランクルの所にやって来て「どうしても自殺したいという人を思い留まらせるために何か話をしてやってくれ」と頼みます。フランクルは次の話をします。「私達は、殆ど全員この収容所で死んで行くことになるだろう…私達の人生は、これからの何日間かの苦しみの後にこの収容所で終わるだろう。『それならその死までの何日間かの人生に一体何の意味があるのか。どうせ死ぬならそんな何日間かの無意味な苦しみはやめに一刻も早く死んだ方がいい』と考えている人達があなたの方の中にいることを私は知っている。またそこまではいかないまでも、自暴自棄になり、絶望的になっている人も多いだろ。しかしそれはあなた方が『死ぬまでの苦しみの人生の中から何をまだ得ることが出来るか』と発想しているからいけないのだ。そうではない、視点を転換することが必要なのだ。『これからの苦しみの人生から何を期待出来るか』という発想をやめて『人生がこれからのあなた達の生涯に何を期待しているのか』という視点に立つことが肝要なのだ…この視点の転換を出来た人が、死に向かっての苦しみの中にも、なおその意味を見つけることが出来る人であり、その苦しみを前向きに背負って生きて行くことの出来る人なのだ。「人生があなたの生涯に何を期待しているか」、ユダヤ人であるフランクルは「人生が」というよりも「神が」ということを考えていたと思います。「神が私の人生に何を期待しているのか」、もっと言うと「神が今日の私に何を期待しておられるのか」。「神の權威を受け入れる」ということは、それを考えることだと思うのです。私達は、時に生きる積極的な意義を見失ってしまうことがあるかも知れない。人生に希望を見出すことができないこともあるかも知れません。でも「イエス様が何を求めておられるか、どう生きることを求めておられるのか」、それを生き方とする時、私達は人生を生きる意義(目的)を失うことはないのではないでしようか。前に向かって生きて行く励ましを与えられる気がするのです。そして、その1つ1つの生き方を、神が全部受け止めて下さっているのです。

「主の權威を受け入れる生き方」について 3 つの例を上げました。まだまだ私の知らない靈的な世界があると思いますが、井上神父は、「あちら様が主になる世界」をこう表現しています。「『自分が主』の世界から『従』の世界になった時に与えられる喜び…安堵感(がある)…どんなに信仰がある人だって悲しみはあるし、辛さはあるし…けれども一番違うのは、どこまでも船が流されて行くということは決してないのだという…安堵感…心の安らぎ…が与えられるのである」(井上洋治)。人生にイエス様の權威を認める、本気になって認める。それは決して私達を窮屈にすることではない。むしろ、深みにおいて私達を支えて行くのではないでしようか。「イエスの權威に拠る信仰生活」を紡いで行きたいと願います。